

豊栄地区

豊栄地区は、一八八九年（明治二十二年）四月の九か村合併により、新村の「豊富、繁栄」を念願する住民により村名が付けられました。市域では最多の九か村による合併協議は難航し、村名決定はぎりぎりまで伸び、七つの村名から「豊栄村」が選

ばれました。

時曾根（ときそね）を除いた八か村は、中世以来の集落が近世になり村を形成しました。

一五〇年代の記録によると、匝瑳南条荘のうち、貝塚、田久保（たくぼ）、亀崎、新（しむら）は新置郷（しんちごう）、久方（ひさかた）、木積（きづみ）は吉田郷に含まれました。当時

は、まだ古代からの
国郡郷（くにのこう）

村制度のなごりで郷名がのこり、江戸時代にも新置郷は使われました。飯倉は「飯倉郷」一八か村に含まれたとされませんが、詳細については不明です。

豊栄地区の移り変わりを象徴する飯倉台



飯倉新田に集落ができたのは、三〇〇年ほど前の元禄時代のことです。富岡村は初め松山村（匝瑳地区）に含まれ、三〇〇年前の記録には単独村として記載されていません。一八四三年（天保十四年）ころの富岡村の

家数は三十二軒で、このころには松山村から分離していたのでしょう。

時曾根村は新田集落で、村の成立はやはり四〇〇年ほど前までさかのぼります。毎年二月に大蛇（だいじゃ）三匹をワラで作り、集落の入り口にする行事は、ムラを疫病などから守ろうとする村びとの願いのかたちが今に伝わるものです。

新と書いて「シムラ」といいます。この語源は、木積や田久保集落のシモ（下）に位置することを示す「シモムラ」が「シムラ」と変化したものと見られます。

これら九か村の歴史をふり返るなかでは、村の富裕層のなかに句碑の建立や俳句が盛んであったこと、各村に寺子屋が多かったことなどが指摘できます。また、大原幽学の門人であった飯倉村の椎名氏、幕末の岩村成積（いわむらせいせき）による時習塾など教育や文化面で活況も見られました。

明治中期ころには、木積村での自由党による政治活動、久方村のハリストス正教会設立など新しい時代のうきも見られました。

同地区は昭和から平成にかけて、飯倉台の造成が進み更なる変貌が期待されるでしょう。